

憲法と映画(107)『俺ではない炎上』

<かな>



スマホの普及率が、全国では実に97%に達するという(2024年)。ちなみに我が家は100%です。電車やバスの車中でも見渡せばほとんどの人たちがスマホを手に持ち画面にくぎ付けになっている姿は今や普通の風景になっています。見かねたのか愛知県・豊明市では、「豊明市スマートフォン等の適正使用の推進に関する条例」が可決されて10月1日から施行されています。罰則規定はありませんが、そこには仕事や勉強などを除き、スマホの使用時間を1日2時間までとされています。皆さんは1日どのくらいスマホをさわっているでしょうか。何かと便利なので手放せないのは理解できますが、脳の活性化のためにはスマホから離れる時間も必要だと思いませんか。

映画の話になりますが、大手ハウスメーカーに務める山縣泰介(阿部寛)は、ある日突然、彼のものと思われる SNS アカウントから女子大生の遺体画像が拡散され、殺人犯に仕立て上げられてしまいます。身に覚えのない事態に無実を訴えるのですが、瞬く間にネットは燃え上がり、いわゆる“炎上”状態に。見も知らない群衆がこぞって泰介の職場や自宅などの個人情報特定されて、日本中から追いかけて回されることになり自宅に帰ることもできなくなり家族もバラバラに。自分の無実を証明し真犯人を見つけるため、決死の逃亡劇が始まるのですがどこに隠れても世間の目から逃れられません。SNSを見なければ済むのではというレベルではなく恐怖さえ覚えます。

警察も公園のトイレで刺殺体が発見されたことで動き出し、画像の発信元が泰介の自宅のパソコンであることを把握します。彼を追う謎の大学生・サクラ(芦田愛菜)、大学生インフルエンサー・初羽馬(藤原大祐)、取引先企業の若手社員・青江(長尾謙杜)、泰介の妻・芙由子(夏川結衣)、勤務先や義母まで様々な人物の思惑が複雑に絡み合いいったい誰を信用すればいいのか分かりません。果たして泰介の殺人犯としての汚名は晴れるのか。真犯人はいったい誰なのか。

サスペンス仕立てのこの映画は最初から最後まで観客の心を鷲掴みして離しません。